# アジア太平洋地域における知的共同体の再構築
## ―記憶の継承をめぐる中国・日本・米国の戦争博物館の比較研究を中心に―

**馬　暁　華**
大阪教育大学教育学部　准教授

### 緒　言

本研究は、比較歴史社会学の方法を用いて、冷戦後における日本・米国・中国三国間の関係を中心に据えて、歴史認識の相違をめぐる中国・日本・米国三国関係の変容過程を新たな視点より解明しようとするものである。具体的には、公的記憶の創出・維持・伝達・増幅の装置である三国の戦争・平和博物館の展示に注目し、ナショナリズムの形成過程を立体的に分析する。その上で、アジア・太平洋地域における国際関係の再編過程を新たな視点より解明し、歴史和解への道を実現できる新たな方法を探る。

従来、博物館というテーマは、主として文化史の一部として扱われ、都市文化の形成に関連して論じられてきた。しかし、様々な視点と物語が交差する空間である博物館にどのような政治的意図が生じるかについては、これまで研究されていない。実際に博物館の展示の背景には様々な恣意的な営みがある。たとえ展示物が沈黙していても、それらは特定の歴史観、及び展示・設計思想のもとで選択され、配置される。しかも映像と音響を展示物と融合させる技術の発達が目覚ましい現在、大衆文化としての博物館の展示は、歴史的な遺産や展示物を通して、歴史の語りの重層性、さらに国民意識の変容・再構築を解明する上で、重要な手掛りとなる。すなわち、博物館の使命は、歴史的な遺産の収集、保存、展示、研究、教育といった旧来の活動に加えて、人々が自らの歴史観や歴史認識を確認、修正、再構成する国民のアイデンティティ形成の場として、きわめて政治的な意味合いをもっている。

本研究プロジェクトのなかで、重点を置いているのは、中国・日本・米国三国の戦争・平和博物館の展示の在り方によって、歴史認識における相違が三国間の信頼関係の醸成に与えた影響を明らかにすることである。その上で、戦争・平和博物館の展示をめぐる中国・日本・米国三国の知的対話の可能性を模索する。

### 調査・分析の方法

まず中国・日本・米国における戦争・平和博物館に関する基礎データ・文献調査を中心に進める一方、中国・日本・米国の戦争・平和博物館において発行されているガイトブック・パンフレットなどの資料を収集し、研究調査を行った。

日本国内において、アジア太平洋戦争に関連する平和資料館・記念館を調査し、各博物館の設立の経緯を当時の社会的・政治的背景をもとに研究調査を行った。具体的に「広島平和記念資料館」、「国立広島原爆死没者追悼平和記念館」、「長崎原爆資料館」、「国立長崎原爆死没者追悼平和記念館」、東京にある「平和祈念展示資料館」と「昭和館」、「大阪国際平和センター(ピースおおさか)」、「沖縄県平和祈念資料館」、「知覧特攻平和会館」、「舞鶴引揚記念館」を中心に調査訪問した。同時に各博物館の設立の経緯を当時の社会的・政治的背景をもとに検討し、これまでのコレクションの形成やその特徴、および展示の変遷について調査・分析した。

それから中国各地の戦争博物館、たとえば「南京大虐殺遇難同胞記念館」、「中国人民抗日戦争記念館」(北京)、「9・18 歴史博物館」(瀋陽)など、および米国の戦争博物館、特にアジア系移民の歴史博物館(主にサンフランシスコに「中国人移民歴史博物館」とロサンゼルスにある「日系移民博物館」)における戦争展示の資料収集と聞き取り調査を行い、博物館設立の経緯や展示内容の変更などについて調査研究を行った。その後、さらに調査対象を拡大し、実際の展示内容の確認を行うなど本格的な調査に着手するとともに、中国・日本・米国三国の戦争・平和博物館の展示手法、解説パネルの分言、映像や写真資料の種類などのデータを集積することに力を注ぎ、考察した。中国、日本、米国の戦争・平和博物館が、アジア太平洋戦争にかかわる重要な歴史事件について、どのように解釈するか、なぜ同じ歴史事件に対して、三国の解釈が全く異なるのか、比較しながら総合的に分析した。

## 結　　論

人ともの、人と人とが実際に出会うことのできる博物館という空間は、異なる価値観、異なる歴史観に基づく世界の表象を、ぶつけ合うことができる空間でもある。博物館は、何かを展示することで、情報を伝達し、人々に受け入れられ、その結果、「記憶の共同体」を作り上げる装置として位置づけられている。

継承される戦争の体験や戦争の記憶は、国により大きく異なる。中国・日本・米国の戦争・平和博物館を考察する際に、それぞれ異なる戦争の体験や記憶を持ち三国の国民にとって、国境を越える「記憶の共同体」を築くことは確かに難しい。だが様々な「記憶」があるなかで、隣人と共生するために、そして未来のために今から「共通の戦争体験の記憶」を築くのはきわめて大切である。記憶の共有とは、決して同一の歴史認識を持ち合うことではない。その相違性を踏まえることにより、異なる歴史認識を相互に認め合い、知識や情報や歴史事実の確認などを公開することを通して、その相違性から生じる誤解や偏見を解消していくことが重要である。つまりアジア太平洋地域における中国・日本・米国三国の信頼醸成の構築は、記憶の共有化の作業を経過して得られる歴史和解によって実現されるであろう。

本研究では中国・日本・米国三国における博物館展示の比較研究を通じて、アジア・太平洋地域における信頼醸成の構築過程において、記憶の共有を目指す中国・日本・米国三国における知的共同体の可能性を探っている。さらに、地球市民として 21 世紀に生きる次世代を担う人材を育成するため、アジア太平洋地域共同体の再構築過程において、中国・日本・米国三国が歴史の記憶の共有を如何に構築すべきかを探ろうとするものである。

## 今後の課題

今回の調査においては、中国・日本・米国における戦争・平和博物館を中心に研究調査を行った。今後、中国・日本・米国三国の戦争・平和博物館の状況を個別に検討し、三国の戦争・平和博物館の全体像を総合的に分析する必要があるだろう。

**注：**上記の内容について、2012年4月10日に国際日本文化研究センターで開催された「東アジア近代史における“記憶と記念”」国際フォーラムにて招待講演を行った。

## 謝　　辞

本研究の遂行にあたり、平成 23 年度学術研究奨励金のご支援を賜りました公益財団法人三島海曇記念財団に篤く御礼を申し上げます。

## 文献資料

1）油井大三郎：日米戦争観の相克－摩擦の深層心理、岩波書店、1995 年
2）歴史教育者協議会:平和博物館・戦争資料館ガイドブック、青木書店、2004 年
3）Timothy W. Luke：*Museum Politics: Power Plays at the Exhibition*, University of Minnesota Press, 2002.
4）Edward T. Linenthal and Tom Engelhardt, et al,：*History Wars-The Enola Gay and Other Battles for the American Past*, Henry Holt and Company, 1996.
5）Warren Leon and Roy Rosenzweig, et al,：*History Museum in the United States*, University of Illinois Press, 1989.
6）Benedict Anderson：*Imagined Communities-Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (New Edition), Verso, 2006.